

クラウドのインテリジェントな導入： TBMを活用したクラウド移行の意思 決定の最適化

eBook



2024年10月

著者

Tim Sady

TBM Practice担当リーダー
Deloitte

Josh Bauman

Cloud Operations部門長
IBM Apptio

Phil Alfano

Field担当CTO
IBM Apptio

Ed Hayman

Product Management担当シニア
ディレクター
IBM Apptio

Sharada Panchagnula

Product Management担当シニア
ディレクター
IBM Apptio

Phil Purcell

FinOps担当シニアコンサルタント
IBM Cloudability

Cloud Strategy Community**Ankur Sharma**

IT Finance - Platform and Infrastructure、
FinOps、およびTBM担当取締役
Freddie Mac

Kevin Wehde

Technology and Transformation Business
Office、Cloud and Data Center Management
担当リーダー
American Airlines

Jennifer Bishop

IT Finance TBM担当マネージャー
UPS

Jane Daniel

TBM Finance担当取締役
Kaiser Permanente

Vik Saluja

TBM Cloud Economics担当取締役

TBMカウンシル**Justin Mann**

Research and Standards部門長

Jeff Bartelli

Technical Content担当マネージャー

Powell Latimer

Market Research and Analytics担当
マネージャー

© 2024 TBM Council.無断複写・転載を禁じます。本書のいかなる部分も、出版者の書面による事前の許可がない限り、複写、記録、またはその他の電子的もしくは機械的方法を含むいかなる形式または手段によっても、複製、頒布、送信することはできません。ただし、批評記事の中の短い引用文、または著作権法で認められたその他の特定の非営利使用についてはこの限りではありません。本書に含まれる情報は、いかなる保証もなく「現状のまま」提供されます。著者およびTBMカウンシルは、本情報の使用に関して一切の責任を負いません。情報の正確性、完全性、および特定目的への適合性を確認する責任は、読者にあります。本書は、専門家のアドバイスまたはガイダンスに代わるものではありません。本書に記載されているすべての商標、サービスマーク、および商号は、各所有者に帰属します。



クラウドのインテリジェントな導入

TBMを活用したクラウド移行の意思決定の最適化

目次

- 第1章：クラウド導入の課題
- 第2章：テクノロジービジネスマネジメント
- 第3章：TBMを活用したクラウドのインテリジェントな導入
 - 初期評価の実施とビジネスケースの特定
 - 移行パス選択の6つのR
 - 包括的な価値計画の6つの次元
 - TBMを活用したシナリオプランニング
 - 推奨ソリューションのパイロットと移行の実行
 - TBMを活用したメリットの追跡
- 第4章：その他の考慮事項
 - 合併、買収、分割
 - M&Aデューデリジェンス
 - クラウドの価値の成熟化
- 結論：TBMを活用したクラウドのインテリジェントな導入
 - その他のリソース
 - TBMカウンスルについて

第1章：クラウド導入の課題

クラウド移行は長期的な価値をもたらす反面、そのメリットを損ない、製品チームが最適なソリューションを選定できなくなる可能性のある課題が伴います。多くの場合、戦略的な命令によって移行が推進されるため、ワークロードごとの詳細なビジネス価値計画が省略され、包括的な計画策定がされず、他部門と連携が取れていません。

また、選択肢の複雑さにより、さらに課題が生じます。ハイブリッドクラウド戦略を導入する企業が増える中、複数のオンプレミス環境、複数のベンダーなど、チームはさまざまな選択肢を検討する必要があります。

単一のクラウドプロバイダーでも、データストレージ、ワークロードのサイジングなど、多様な選択肢があり、その選択によって価値が高まったり損なわれたりすることがあります。地域や業界特有の規制など、デジタルセキュリティとコンプライアンスをめぐる状況は常に変化しており、さらに複雑化しています。さらに、合併、買収、分割(M&A&D)により、意思決定がさらに困難になり、不適切なデプロイメントが加速する可能性があります。

データの有効性は重要な課題です。TBMカOUNシルのメンバーの45%が、クラウドの支出を最適化したり報告したりする際の主な問題として、データの正確性や有効性を挙げています。可視性の欠如は意思決定を妨げ、非効率性や予期せぬコストにつながります。

こうした課題はありますが、戦略的に取り組めば、クラウド移行は大きな価値をもたらします。ここで重要な役割を果たすのが、テクノロジービジネスマネジメント(TBM)です。

クラウド移行の一般的な課題とリスク：

- 戦略やアーキテクチャーに関する意思決定の際に、ワークロードごとのビジネス価値計画がされていない
- 「リフトアンドシフト」の目標が、包括的な価値計画を策定されことなく強制されている
- 包括的ではなく、狭い範囲でのみ価値が検討されている
- ハイブリッドクラウド環境の選択の複雑さ
- 単一のクラウドサービスプロバイダー内での選択の複雑さ
- デジタルセキュリティの環境が常に進化している
- リパトリエーション(回帰)コストが高額

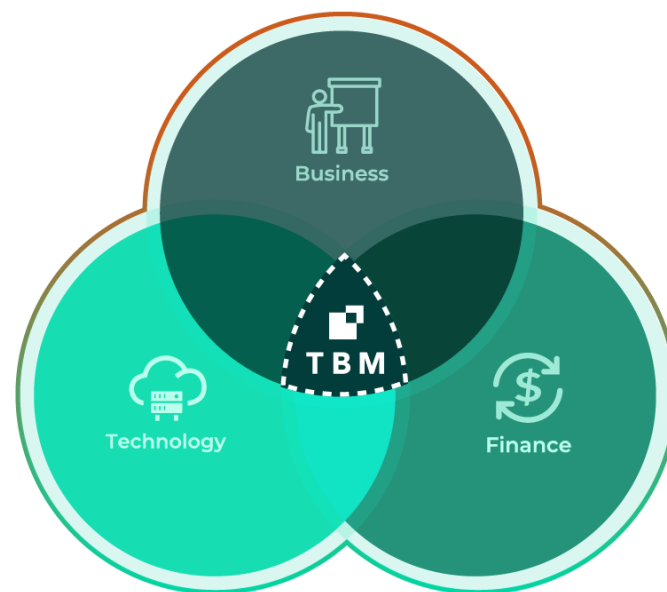
第2章：テクノロジービジネス マネジメント

急速な技術の進歩に伴い、企業は利益を最大化するために賢い投資をしなければなりません。重要な課題は、ワークロードのクラウドへの移行など、テクノロジーへの投資の具体的な価値を実証することです。多くの企業がテクノロジーコストを最適化する取り組みを行っていますが、ステークホルダーのエンゲージメントが不十分であることや、データ主導の意思決定がされていないことにより、目標を達成できていません。

こうした状況の中、テクノロジーリーダーにとって極めて重要なフレームワークとして、**テクノロジービジネスマネジメント(TBM)**が登場しました。TBMはテクノロジーへの投資に対するバランスの取れたアプローチを推進し、単にコストを抑制するのではなく、価値実現を重視します。TBMの原則を採用することで、組織は可視性を獲得し、コミュニケーションを促進し、データ主導のより良い意思決定を行うことができます。このような戦略は、効率化、プロジェクト成果の改善、顧客と従業員の満足度の向上、より正確な予算策定につながります。

TBMを**IT財務管理(ITFM)**や**クラウド財務オペレーション(FinOps)**といった専門分野と統合することで、テクノロジーへの投資を管理するための一貫したソリューションが得られます。その結果、組織は、テクノロジーがビジネス価値に十分に貢献することを実証しながら、クラウドのインテリジェントな導入など、現代のテクノロジー環境の複雑性に対処することができます。

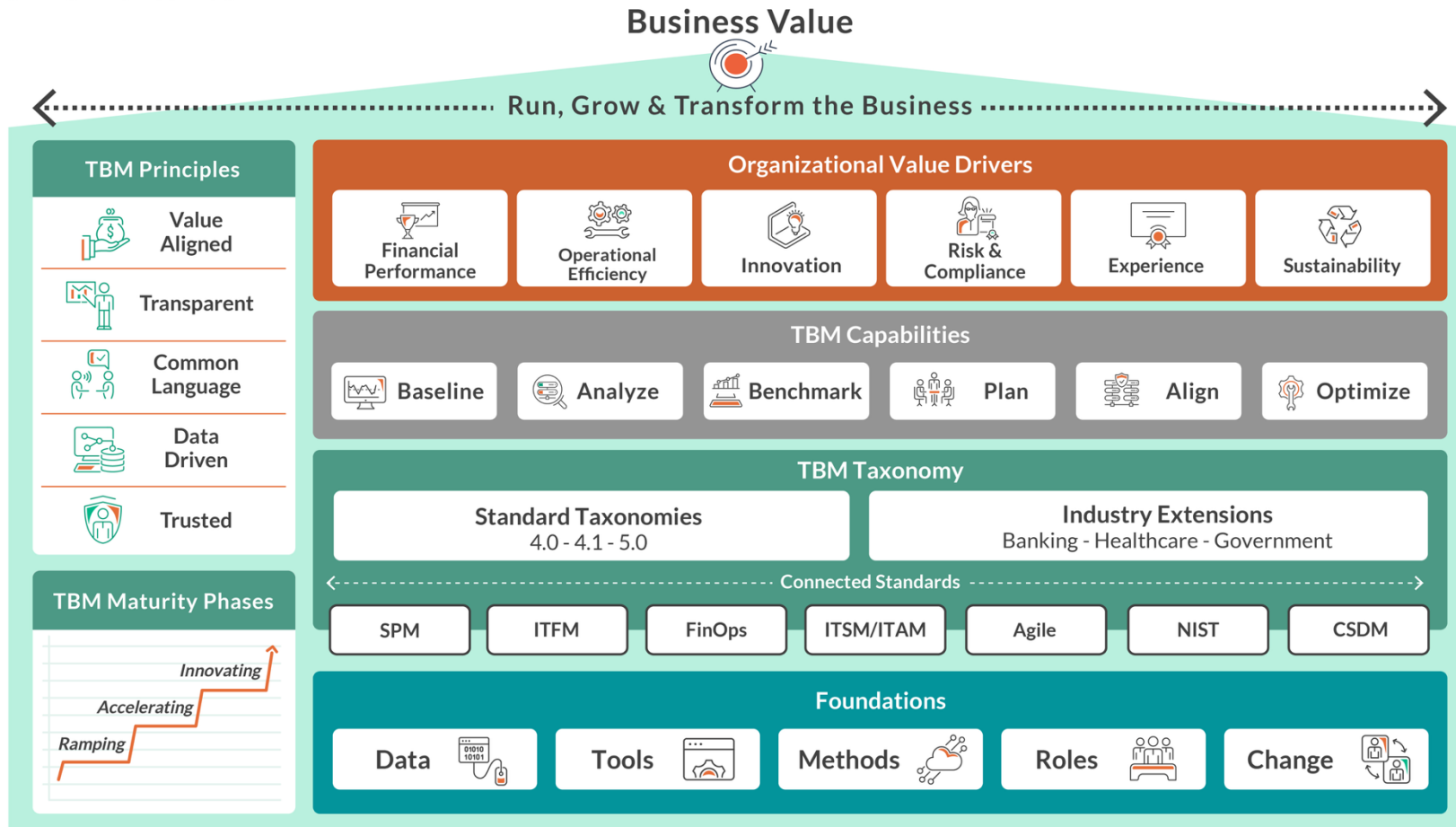
テクノロジービジネスマネジメントはソフトウェアではありません。**価値、コスト、パフォーマンス**の理解に**焦点**を当て、テクノロジーへの投資を管理するための体系的なアプローチを提供する**規律**です。TBMは、特定の метод論、ツール、測定基準で構成され、テクノロジーマネジメントの中でも独特な専門分野となっています。特に、TBMの規律により、テクノロジー戦略を周知させ、ビジネス戦略や株主／ステークホルダーの目標と整合させるという好循環が生み出されます。



組織全体の規律としてのTBMの導入

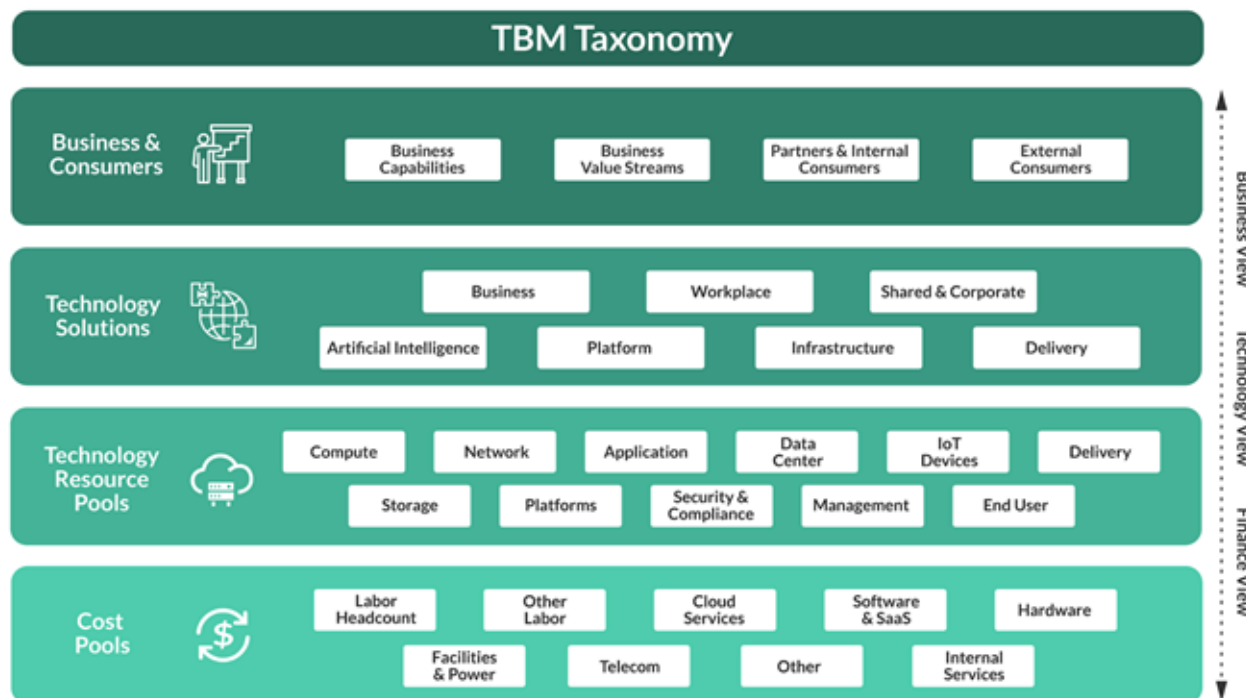
TBMフレームワークは、この規律の多様な要素を一貫した構造にまとめたもので、テクノロジー部門のリーダーによるTBM規律の導入および構築を成功させ、持続可能なものにし、価値を迅速に実証できるようサポートします。チームの経験が浅いか豊かかを問わず、その規律を成熟させるための道筋を提供し、チームがテクノロジーを通じてビジネスを運営し、成長させ、変革させる中で、すべての活動を価値創造に整合させるのに役立ちます。基本となる規律に支えられたこのフレームワークにより、組織の戦略の基礎となる主なバリュードライバーに影響を与えるうえで必要なTBMの能力、モデリング、首尾一貫した基準、データが周知されます。

Framework 2.0



ステークホルダーを巻き込むための共通言語であるタクソノミー

TBMタクソノミーは、**テクノロジーリソース**、**コスト**、**サービス**を理解するために利用される分類システムです。また、テクノロジーへの投資を分析し報告するための共通言語であり、フレームワークです。テクノロジーコストには、資本支出、運用費用、テクノロジーサービスに関連するコストなど、テクノロジーに関連するあらゆる費用が含まれます。テクノロジーサービスは、組織が顧客や社内ユーザーに提供する特定のテクノロジー能力や機能を指します。



TBMタクソノミーにより、**コストの可視性の向上**、**パフォーマンス測定の強化**、**データ主導の意思決定**、**コミュニケーションの円滑化**など、さまざまなメリットがもたらされます。テクノロジーコストがサービス部門やビジネス部門にどのように配分されているかを理解することで、支出を最適化し、無駄を排除することができます。これは、テクノロジー部門のリーダーがコストを価値に変換するために不可欠です。データ主導の意思決定の基盤が構築されることで、リソースを効果的に配分し、テクノロジーの取り組みに優先順位をつけることが可能になります。**共通のタクソノミーを用いることで、テクノロジー部門とビジネス部門のステークホルダーが同じ言語で対話できるため、コミュニケーションとコラボレーションが向上します。**

第3章：TBMを活用したクラウドのインテリジェントな導入

これまで、TBMの基礎について説明しましたが、本章では、TBMを活用してインテリジェントなクラウドの導入を推進するための体系的なアプローチについて説明します。まず、現在のワークロードのパフォーマンスと消費のベンチマークを行いながら、戦略的目標、アーキテクチャーの目標、およびユーザー目標を考慮して初期評価を行い、ビジネスケースを作成します。TBMは、デプロイメント環境、サービスの選択肢、一般的な移行パスを評価することで、この段階を通じて製品チームをサポートします。

次に、チームはTBMタクソミーを活用することで包括的な価値計画を作成して総所有コスト(TCO)をモデル化し、異なる次元の価値がさまざまな移行シナリオにどのような影響を与えるかを理解します。その後、選択した移行パスのパイロットを実施してパフォーマンスをテストします。これにより、本格的に移行する前に調整することができます。最後に、TBMの実務を継続的に実施することで、実績と予測の比較、メリットの追跡、新たな要件が生じた際の再デプロイメントの機会の評価を行います。

本章では、価値主導のクラウド移行を確実に成功させるための重要なステップについて解説します。以下のトピックは、最適な結果を得るためにテクノロジービジネスマネジメント(TBM)をクラウド戦略に統合する場合に役立ちます。

- 初期評価の実施とビジネスケースの特定
- 移行パス選択の6つのR
- 包括的な価値計画の6つの次元
- TBMを活用したシナリオプランニング
- 推奨ソリューションのパイロットと移行の実行
- TBMを活用したメリットの追跡

初期評価の実施とビジネスケースの特定

クラウドのインテリジェントな導入は、対象のアプリケーションやワークロードの優先順位、目標、要件を完全に理解することから始まります。そのためには、現在のパフォーマンスと消費傾向の徹底的なベンチマークを行い、利用可能な移行パスと環境を評価することが必要です。この初期段階で、ビジネスケースの強固な基盤と、データ主導の移行を将来的に決定するための土台を構築します。TBMにより、こうした分野にわたって貴重な洞察とデータが提供されます。



目標と要件の整合

今後の移行がユーザー基盤に望ましい結果をもたらし、より広範なビジネス目標と整合し、アーキテクチャー要件を満たしていることを確認します。

- TBMを活用し、アプリケーションおよびテクノロジーリソースが製品、ポートフォリオ、消費者、事業分野と整合していることを理解する。
- ユーザー基盤の要件を定義する。
- アーキテクチャーおよび関連するクラウドガバナンス要件を精査する。
- 移行ビジネスケースを戦略的優先事項と整合させるため、ビジネス目標および機会を要件と統合する。



ベンチマーク

明確なパフォーマンスベースライン、過去の消費傾向、およびワークロードに関連するコストを設定し把握します。

- TBMを活用し、さまざまな消費者と事業分野によるテクノロジーリソースの消費を把握する。
- レイテンシや稼働時間など、ベースラインとなるパフォーマンスKPIを文書化する。
- 現在のコスト構造と、現在の環境でアプリケーションを維持することによる財務的な影響を分析する。



移行の選択肢の評価

デプロイメントが可能な環境と、一般的な移行パスの全体像を理解します。

- さまざまなオンプレミス設備やパブリッククラウドサービスプロバイダーなど、組織の既存戦略の中で利用可能なクラウド環境を精査する。
- 特定のクラウドサービスプロバイダーのサービスタイプの範囲を評価する。
- 次ページに詳述されている一般的な移行パスを理解する。

移行パス選択の6つのR

クラウド移行の6つのRとは、組織がアプリケーションやワークロードをクラウドに移行する際に用いる戦略であり、それぞれ特定のビジネスニーズに合わせて調整されます。ここでは、それぞれの概要と、テクノロジービジネスマネジメントがそれらにどのように役立つかについて説明します。

- 1 **Rehost(リホスト)**:アーキテクチャーを変更することなく、オンプレミスからクラウドへアプリケーションを移行します。TBMは、クラウド環境とオンプレミス環境のTCOを比較することで、移行前後のコスト管理を支援し、財務的な正当性を確保するのに役立ちます。
- 2 **Replatform(リプラットフォーム)**:クラウドネイティブサービスの導入など、アプリケーションをクラウド向けに最適化するために最小限の調整を行います。TBMは、こうした調整にかかるコストを追跡し、クラウドの最適化が長期的な目標と整合しているかを確認するのに役立ちます。
- 3 **Repurchase(リパーチェス)**:アプリケーションをSaaSのようなクラウドベースのサービスに切り替えます。TBMは、ライセンスコストとメンテナンスコストを比較することで、SaaSへの切り替えによるコストとビジネス価値を評価し、移行が組織の戦略に整合するかを確認するのに役立ちます。
- 4 **Refactor/Rebuild(リファクタリング/リビルド)**:クラウドネイティブ機能を十分活用するためにアプリケーションを再設計します。TBMは、開発コストと運用コストを追跡し、リビルドが財務目標と整合し、スケーラビリティと効率によって長期的な価値をもたらすことを確認するのに役立ちます。
- 5 **Retire(リタイア)**:不要または冗長なアプリケーションを廃止します。TBMは、十分に活用されていないサービスを特定し、クラウドリソースの効率的な配分とコスト削減を可能にするのに役立ちます。
- 6 **Retain(リテイン)**:クラウド移行が不可能な場合、アプリケーションをオンプレミスに維持します。TBMは、継続的なコストを追跡し、クラウドの代替案とこうしたコストを比較することで、財務上健全な決定を確実に下すうえで役立ちます。

クラウド移行の6つのRに対するTBMのサポート:

コストの可視化:TBMは、各移行戦略に伴うコストを細粒度で可視化し、組織が確実にデータ主導の意思決定を下せるようサポートします。

価値実現:TBMは、クラウドへの投資をビジネス目標に整合させることで、移行戦略が測定可能なビジネス価値をもたらすことができるようサポートします。

最適化の機会:TBMは、使用量の追跡、非効率性の特定、コスト効率の高いクラウドリソース管理を通じて、移行後のクラウド環境が継続的に最適化できるようサポートします。

リスク管理:TBMは、財務リスク、セキュリティリスク、コンプライアンスリスクなどの移行リスクを追跡し、選択した移行戦略が組織のリスク許容度と確実に整合するようサポートします。

包括的な価値計画の6つの次元

戦略目標を理解し、ベンチマークを行い、利用可能なすべての選択肢を評価する初期段階が完了したら、製品チームは移行の最終決定に必要な情報を提供するために、最新の価値計画を作成する必要があります。製品チームは、狭い価値観に基づいて計画を作成するのではなく、包括的なアプローチを採用することが重要です。

これらの各次元とクラウド移行への影響については、次ページ以降で詳しく説明します。TBMは、組織と製品チームが異なる次元の価値間のトレードオフを効果的に理解できるようにすることで、移行計画のこの段階で重要な役割を果たします。



コストの次元 - クラウド移行コストを理解する

クラウド移行では、財務効率を確保するうえで慎重な管理が要求される複数の主要コストについて考慮する必要があります。

TBMにより、こうしたコストが詳細に可視化されるだけでなく、移行を継続および管理するための戦略の概要が明らかになり、既存資産の価値を最大化し、スムーズで予測可能な移行を確実にすることができます。

1 移行コストとダブルバブルコスト:

組織は、クラウド移行中、人件費、クラウドツール、データ転送、アプリケーションのリファクタリングなど、当面の費用に直面します。さらに、複数のシステムを暫定的に重複して維持することにより、ダブルバブルコストが発生します。TBMにより詳細に可視化することで、コストを正確に追跡および配分し、異なるシステムのコストを比較し、ダブルバブルコストを最小限に抑えることができます。その結果、財務上よりスムーズで予測可能な移行が可能になります。

2 サunkコストと減価償却の検討:

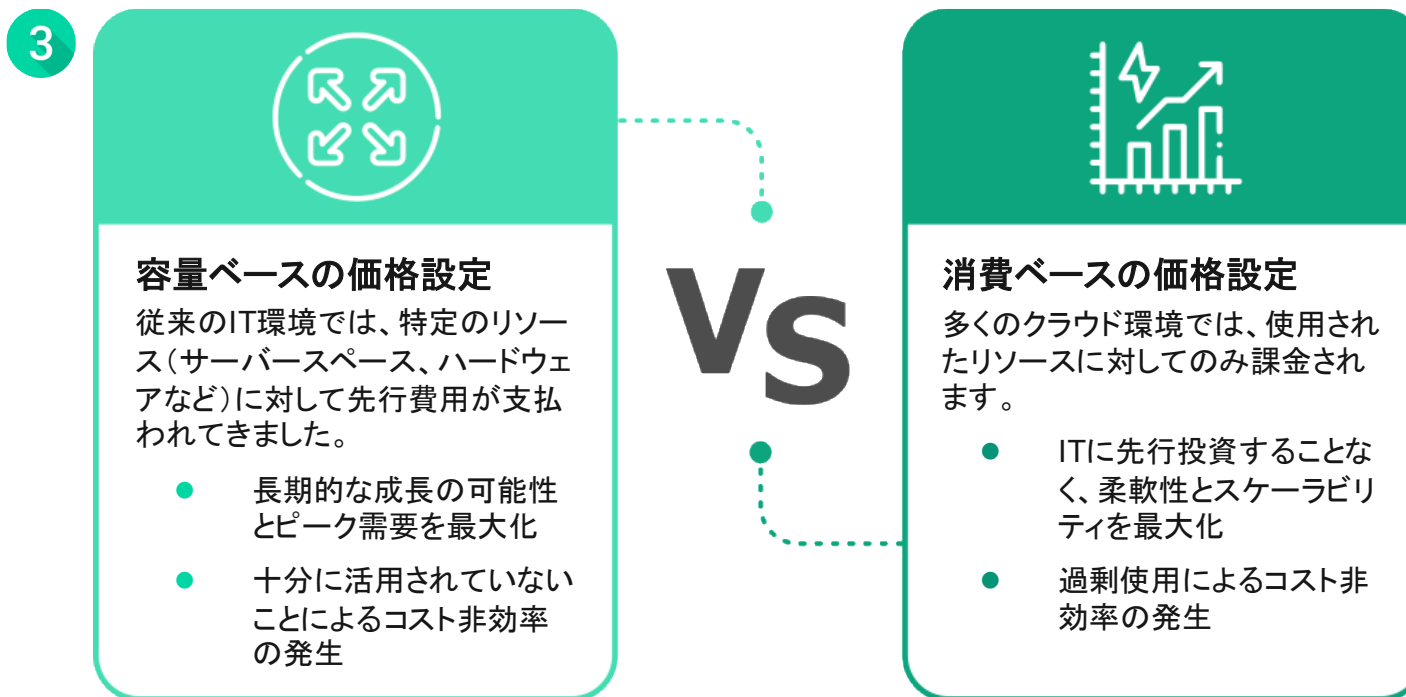
組織は、サunkコスト（オンプレミスのハードウェアとソフトウェアへの回収不能な過去の投資）を抱えていることが多々あります。TBMは、既存の資本投資とその減価償却方式を追跡することによって、こうした複雑な問題に対処するのに役立ちます。また、TBMにより、移行を遅らせたり、段階的に導入したりする戦略の概要を可視化することで、既存資産の価値を最大化することができます。



コストの次元 - 容量ベースと消費ベースの価格設定

TBMは使用パターンと財務への影響を追跡するツールを提供し、クラウドリソースが実際のニーズに基づいて確実に供給されるようにします。TBMにより使用量と財務成果が整合されるため、コスト管理を最適化し、クラウド環境でのコスト超過を防止できます。

FinOpsの実務では、財務、IT、運用の各部門間のコラボレーションを促進することで、コントロールのレイヤーをもう1つ追加します。TBMは戦略的な可視性を提供し、FinOpsはリアルタイムのコスト管理を可能にします。TBMとFinOpsは共に、クラウドリソースが効率的に使用されることを確実にします。



コストの次元 - TBMによる長期的なクラウドコストの管理

組織がクラウドテクノロジーを採用する場合、コスト面の検討がさらに必要になります。ここでは、TBMがこうしたコストの効果的な管理にどのように役立つかを説明します。

4 変動費の管理とクラウドコストの予測:

クラウド環境では通常、使用パターンに応じて上下する変動費が発生します。こうしたコストを予測することは困難です。TBMは、コストドライバーや使用傾向を可視化し、コストを予測するのをサポートします。過去のデータ分析や傾向の監視を通じて、組織が正確なコスト予測を立てる場合に役立ちます。このような積極的なアプローチにより、変動費をより適切に管理し、経費を管理するための最適化の機会を特定できます。

TCOと長期計画:

- 5 TCOには、初期投資、運用経費、継続的なメンテナンス費用など、クラウド導入のライフサイクルを通じたコストが含まれます。TBMによりクラウドコストを従来のオンプレミス環境と比較することで、TCOの包括的な視点が得られます。クラウドへの投資を戦略的なビジネス目標と整合させることで、長期的な財務計画の策定を支援し、クラウドの導入が持続的な価値とコスト効率をもたらすことを確実にします。



パフォーマンスの次元

パフォーマンスの次元では、クラウドソリューションが組織の運用要件を満たすか、それを上回るかを確認することに焦点を当てます。パフォーマンスを重視することで、システムの応答性、スケーラビリティ、信頼性が改善され、最終的にユーザー満足度と生産性が向上します。

クラウド移行により、パフォーマンスに大きなメリットがもたらされます。

- **スケーラビリティ**: クラウドプラットフォームにより、変動するワークロードに合わせて自動調整可能なリソースが提供されるため、オーバープロビジョニングを防止して、ピーク時に一貫したパフォーマンスを確保できます。
- **信頼性**: クラウドプロバイダーは、冗長インフラと高度なフェイルオーバーメカニズムによって高可用性を実現し、ダウンタイムを短縮して継続的なサービス提供を保証します。
- **レイテンシの短縮**: ユーザーに近いデータセンターを選択したり、コンテンツデリバリーネットワーク(CDN)を利用したりすることで、レイテンシを最小限に抑え、アプリケーションの応答性を向上できます。

クラウドでパフォーマンスを最適化するには、確実な監視と管理の実務を行うことが重要です。パフォーマンス監視ツールを活用することで、組織はシステムパフォーマンスをリアルタイムで把握し、ボトルネックを特定し、データ主導の調整を行うことができます。こうした積極的なアプローチにより、パフォーマンスを常にビジネス要件と整合させることができます。

TBMをパフォーマンス戦略に取り入れることは、組織がパフォーマンスの改善をビジネス価値に結びつけるうえで役立ちます。TBMのコストと価値の指標を使用することで、意思決定者はパフォーマンス向上による財務的影響を評価し、投資がプラスのリターンをもたらす、戦略的目標と整合していることを確認できます。

パフォーマンス戦略を実行するためのヒント:

1. **現在のパフォーマンスの評価とベンチマーク**: パフォーマンステストツールを使用して、移行前のベースライン指標を把握します。
2. **パフォーマンス目標とビジネス目標との整合**: パフォーマンスの改善が、顧客満足度や収益の成長など、主なビジネス成果をサポートすることを確実にします。
3. **TBMの活用**: TBMのフレームワークを活用して業績指標をコストと価値に関連付け、情報に基づいた意思決定に役立てます。
4. **ステークホルダーのエンゲージメント**: IT、財務、ビジネスの各部門とのコラボレーションにより、最も大きな価値をもたらすパフォーマンス強化に優先順位をつけます。
5. **継続的な最適化の計画の策定**: 変化する需要に適応するため、継続的なパフォーマンスの精査と最適化の文化を確立します。

リスクの次元： リスク最小化手段としてのクラウド

価値を形成するうえで、リスクは重要な次元です。製品チームは、提案されたクラウド移行に伴うリスクを検討する際、脅威の検出、暗号化、IDおよびアクセス管理(IAM)など、クラウド環境のデジタルセキュリティ面だけでなく、以下のような製品リスク、ビジネスリスク、戦略的リスクも評価する必要があります。

- コンプライアンスと規制
- データ主権
- サービスの可用性
- スケーラビリティ
- 相互運用性と統合のリスク
- ベンダーの固定

クラウド環境により、これまで組織が課題としてきた運用リスクやインフラリスクを軽減する機会が提供されます。大手クラウドプロバイダーは、高可用性、障害回復、高度な監視機能など、多くの企業が社内実現するのが困難なレジリエントなシステムの構築に多額の投資を行っています。オンプレミスのクラウドソリューションでも、従来のリスクを監視、管理、軽減するための幅広い機能が提供されています。

クラウドはオンプレミスのハードウェア障害から局所的な障害にわたる従来のリスクを最小限に抑えけるとともに、従来の復旧戦略に伴う要員、コスト、作業を削減する高レベルの能力を製品チームに提供します。しかし、クラウド移行にリスクがないわけではありません。



TBMにより、財務リスクを完全に可視化し、各クラウド移行シナリオのリスクコスト分析を行うことができます。

TBMの詳細なコストのモデル化と財務の可視化の機能を活用することで、製品チームは、現在の環境と、オンプレミスクラウドまたはベンダーやサービスの異なる組み合わせに移行するリスクと財務的な影響を比較し、データ主導の意思決定を行うことができます。

リスクの次元：クラウドにおける新たなリスクの検討

クラウド環境により、従来のリスクを最小限に抑えることができる一方で、製品チームとテクノロジーチームが評価しなければならない新たなリスク要素が発生します。以下に示すように、検討が必要な事項は、デジタルセキュリティや幅広いビジネスリスクに及びます。

- **ベンダーのセキュリティに対する姿勢**: サードパーティプロバイダーには独自のセキュリティ管理、方針、SLAがあるため、それらを評価する必要があります。
- **データ漏洩と不正アクセス**: クラウド環境は共有されるため、厳格なIAM、暗号化、第三者による監視が必要です。
- **APIの潜在的な脆弱性**: セキュリティが不十分なAPIや公開されたAPIは、悪用の入り口となる可能性があります。
- **マルチテナンシーの脆弱性**: 複数の顧客が同一の物理インフラを共有するため、あるテナントのリソースが危険にさらされると、他のテナントにも影響が及ぶ可能性があります。
- **コンプライアンスのリスク**: HIPAAやGDPRなどの規制は、セキュリティ要件やデプロイメントの選択に影響を与える可能性があります。
- **データレジデンシーとデータ主権**: さまざまな地域にまたがってデータを保存する場合、データレジデンシー法に関するコンプライアンス上の懸念を引き起こす可能性があります。

クラウドの現実のリスクと知覚リスク

クラウドによりリスクの状況が変化し、特定の脅威がもたらされますが、同時に誤解もあります。たとえば、マルチテナンシーのリスクについては、クラウドプロバイダーが強固なセキュリティ対策を採用していることを見落としているために誤解が生まれる場合があります。こうした知覚リスクにより、組織は価値を創造し、現実のリスクを最小化する機会を失う場合があります。

メディアは時々、Google Cloudで大手顧客のアカウントとデータが削除されたとか、あるいは、業界の調査では最大42%の組織が、クラウドのワークロードの少なくとも一部をオンプレミスに移行していると示唆されているなど、クラウドの深刻な問題を報道することがあります。こうした事例はほとんど発生しませんが、リスク許容度を決定する際には、これらを考慮する必要があります。



タクソノミー4.1では、TBMはNISTサイバーセキュリティフレームワークと統合され、さまざまなユースケースに対して双方向のマッピングを提供しています。この統合により、リスクプロファイルとランキングを財務の可視性と整合させることができます。

体験の次元

ユーザー体験は、クラウド移行されたソリューションの知覚価値に大きく影響します。移行によりコスト削減やリスクの最小化を達成したとしても、パフォーマンスの低下、直感的でないインターフェース、不明瞭なコストなど、ユーザー体験が低下すると、定量化可能な多くのメリットが損なわれるおそれがあります。

しかし実際には、ほとんどのクラウド環境は、長期的にユーザー体験を向上する機会を提供しています。ユーザーごとに高度なカスタマイズが可能な最新のUI/UXデザインにより、幅広いセルフサービス機能が実現します。APIは、製品チームがユーザー体験をパーソナライズし、強化することを可能にし、これらは通常、社内で開発されたソリューションよりも低コストで実現できます。一般的に、クラウドベースのソリューションはチュートリアル、FAQ、24時間365日のアシスタンスによってサポートされ、組織の労力を軽減しながらユーザーを教育し、ユーザー体験を向上させるなど、すぐには認識できないメリットがもたらされます。

良い第一印象の重要性

製品チームが取るべき重要なステップの1つは、クラウド移行の結果得られる体験を小規模なパイロットチームとともにテストすることです。コミュニケーション、トレーニング、情報提供の内容といった従来のチェンジマネジメント戦略と並行して、最初の体験を検証し強化することで、ポジティブな第一印象を積極的に与えることができます。そうすることで、製品チームはTBMを活用してコストをモデル化した顧客体験ジャーニーマップを作成し、費用対効果比率が最も高い今後の改善点を特定できます。



TBMにより可視化することで摩擦を軽減し、将来の体験の強化を正当化

TBMは体験を強化するための初期コストと長期的コストに関する重要な洞察を提供し、製品チームが提案された体験マップ全体にわたって詳細な費用対効果分析を実施できるようにします。また、テクノロジーリーダーとプロダクトオーナーに、ユーザー体験の変化による摩擦を軽減するためのツールを提供します。

多くの場合、移行にかかるコストの削減を可視化するだけで、ユーザー体験の変化に対する過度に否定的な認識に対処できます。TBMは防御対策を提供し、多様なステークホルダーグループがコスト、パフォーマンス、その他の異なる次元の価値のトレードオフについて、情報に基づいた意思決定ができる能力を与えます。

持続可能性の次元

持続可能性の次元では、クラウドの導入を、企業の社会的責任(CSR)の取り組みと規制要件に整合させることで、テクノロジーの運用が環境に与える影響を検討します。環境への関心がますます高まるにつれ、組織は持続可能性をテクノロジー戦略に組み込むことの重要性を認識するようになっていきます。

クラウドコンピューティングはさまざまな方法で持続可能性目標に貢献することができます。クラウドプロバイダーは通常、高度な冷却システムとエネルギー管理手法を活用した高効率のデータセンターを運営しており、従来のオンプレミス設備と比較して、エネルギー消費量を全体的に低減できます。さらに、多くのクラウドプロバイダーでは、再生可能エネルギー源の利用に取り組むことで、コンピューティング運用に伴う二酸化炭素排出量をさらに削減しています。

クラウドに移行することで、組織は物理的なハードウェアへの依存を減らし、機器の廃棄やアップグレードにより発生する電子廃棄物を最小限に抑えることができます。こうした移行は環境にメリットをもたらすだけでなく、ハードウェアの調達やメンテナンスに伴うコスト削減にもつながります。

持続可能性への配慮を価値計画に取り入れるには、クラウドプロバイダーをその環境活動に基づいて評価し、組織の持続可能性目標に整合したパートナーを選択することが必要です。そうすることで、組織は環境責任への取り組みを示し、ブランドの評判を高め、ステークホルダーの期待に応えることができます。

TBMは、持続可能な慣行に関連するコストとメリットを可視化することで、持続可能性の取り組みをサポートします。TBMを活用したコストのモデル化により、持続可能性と経済的な考慮とのバランスを取りながら、環境に優しい選択肢の採用による財務的な影響を評価できます。この統合的アプローチにより、持続可能性への取り組みがビジネス価値全体に貢献することを確実にします。



アジリティおよびイノベーションの次元

アジリティの次元では、市場の変化、顧客の要求、新たな機会に迅速に対応する組織の能力に焦点を当てます。クラウドの導入により、柔軟でスケーラブルなリソースが提供され、デプロイメントプロセスが加速されることで、アジリティが向上します。クラウドサービスを利用することで、組織は変動するワークロードに合わせてリソースを即座に拡張し、従来のインフラ調達遅れの遅れを回避できます。この柔軟性により、需要ピーク時の信頼性と、低需要時の効率性が確保されます。

Infrastructure as Code (IaC) や継続的インテグレーション／継続的デプロイメント (CI/CD) パイプラインなどのツールにより開発が合理化され、アプリケーションの迅速なデプロイメントが可能になります。その結果、市場投入までの時間が短縮され、組織はチャンスを生かして競合他社をリードすることができます。また、クラウドにより迅速な実験がサポートされるため、リスクを最小限に抑えながら、リアルタイムのフィードバックに基づいて新しいアイデアをテストし、戦略を転換できます。

TBMの原則を統合することで、アジャイルな行動をビジネス目標や財務目標に確実に整合させることができます。TBMは急速な変化に伴うコストと価値を可視化し、意思決定者がスピードと戦略的優先事項のバランスを取れるようサポートします。価値計画でアジリティを優先させることで、不確実性に対処し、顧客のニーズに素早く適応し、競争力を維持する力を組織に与えることができます。

イノベーションの次元では、成長を促し価値を創造する新たなアイデア、製品、サービスを開発する組織の能力に焦点を当てます。クラウドプラットフォームは、先進テクノロジーへのアクセスを提供し、短い開発サイクルをサポートすることでイノベーションを促進します。人工知能、機械学習、ビッグデータ分析などの最先端サービスがオンデマンドで利用できるため、組織は多額の先行投資をすることなく、革新的なソリューションを探求できます。

クラウドにより迅速なプロトタイピングとイタレーションが可能になるため、チームは新しいコンセプトを素早く構築、テスト、改良することができます。その結果、イノベーションプロセスが加速され、従来の開発にかかる時間とコストが削減され、創造性が促進されます。クラウドベースのツールによるコラボレーションの強化により、チームや場所を超えたアイデアの共有が推進され、イノベーションと協同問題解決の文化が育まれます。

TBMを取り入れることで、イノベーションへの取り組みが戦略的に整合され、測定可能な価値が確実に提供されるようになります。TBMのフレームワークは、革新的なプロジェクトの潜在的な投資利益率 (ROI) を評価するのに役立ちます。その結果、組織は最大の影響をもたらす取り組みを優先することができます。価値計画でイノベーションを強調することで、組織は、業界のトレンドを形成し、優秀な人材を惹きつけ、競争の激しい市場で持続的な成長を促進する能力のあるリーダーとしての地位を築くことができます。

TBMを活用したシナリオプランニング

従来は、幅広いステークホルダーの要件をまとめ、異なる領域から得たデータと専門知識に基づいて包括的な価値計画を策定し、複数の移行パスと対象環境にわたって、さまざまな次元の複雑なコストを評価していましたが、これらは骨の折れる困難な作業であり、誤りや非効率によって行き詰まることが多々ありました。

TBMによって、こうした要素が関連付けられ、さまざまなシナリオを評価するための体系的なフレームワークが製品チームに提供されるため、クラウド移行のシナリオプランニングが簡素化されます。

- **異なる次元の価値を統合**: TBMタクソノミーを活用して、パフォーマンス、リスク、持続可能性、体験の目標を関連付けます。
- **予測によるTCOモデル**: TBMタクソノミーを活用して、環境別およびサービスタイプ別の予想経費と、予測される消費ベースの変動費を入力し、各シナリオのTCOモデルを生成します。
- **トレードオフの理解**: TBMを活用して、異なる次元のコストと価値のトレードオフ、および結果として得られるTCOへのそれらの影響を評価します。
- **ビジネス価値との整合**: 各シナリオにより費用対効果が維持され、価値ある成果がもたらされる一方で、より幅広いビジネス目標がどのようにサポートされるかを評価します。



TBMの実務が成熟し、データ、モデル、プロセスが改善されると、製品チームはさらなる洞察を得て移行シナリオの計画策定に自信を深め、クラウドテクノロジーを利用して価値をより効果的に促進できます。

推奨ソリューションのパイロットと移行の実行

製品チームが望ましい移行シナリオを選択したら、次のステップとして、小規模なパイロットで対象環境とサービスをテストすることが不可欠です。このパイロットにより、製品チーム、クラウドエンジニア、さらに少人数のユーザーグループは、本格的な移行の前にソリューションをテストすることができます。

製品チームとクラウドエンジニアリングチームは事前に定義された一連のテストによりパイロットを開始し、将来のソリューションのパフォーマンスを目標KPIに照らしてベンチマークを行うことで、考えられるボトルネックや期待されるパフォーマンスとの相違を特定する必要があります。この段階はユーザーや主なステークホルダーからのフィードバックを収集する機会にもなり、計画された移行をさらに調整することができます。こうした調整がTCOに与える潜在的な影響を素早く理解するためにTBMを活用できます。

パイロットが完了したら、チームは本格的な移行に進むことができます。TBMを使用すれば、人件費、ライセンスコスト、インフラコスト、不測の支出といったすべての移行コストを追跡できます。移行中にTBMによって提供された可視性と洞察により、支出は確実に計画と整合し、より適切な財務管理、および移行後のROIに関するより正確な報告が可能になります。



TBMを活用したメリットの追跡

製品チームは移行直後から、期待されたメリットがクラウド導入によって実現されているかどうかの評価を開始します。移行後の初期評価は可能な限り早期に実施する必要がありますが、直ちに明らかにならないメリットもあります。

移行後の評価では、チームは各次元の価値（コスト、パフォーマンス、リスク、体験、持続可能性、アジリティ）のKPIをテストし、ベンチマークを行う必要があります。KPIには、すぐに利用できるものもありますが、傾向が明らかになるまで数週間のワークロード運用が必要なものもあります。重要なのは、製品チームが4～6週間以内に最初のメリット評価を計画することです。この初期分析は、移行がユーザー基盤にとって意図した目標を達成できたかどうかを検証するうえで極めて重要です。

初期評価の後、チームは継続的にメリット分析を実施し、TBMを活用して、さまざまな次元のコスト、消費レベル、ビジネス目標との整合性を追跡し監視する必要があります。要件や機会が価値の次元を超えて進化し、クラウド環境やサービスタイプが変化した場合、製品チームはTBMを活用して継続的に再デプロイメントのシナリオを評価できます。TBMを長期的なメリットの追跡と統合することで、クラウドへの投資が持続的な価値をもたらし、スケーリング、ホスティング、最適化、またはソリューションへのさらなる投資に関する将来の意思決定に必要な情報を提供することができます。

移行後のメリット評価

- TBMを活用して人件費やリソースコストなどの実際の移行コストを予測と比較し、差異を特定します。
- レイテンシ、システムパフォーマンス、リソース稼働率などのパフォーマンスKPIをテストしベンチマークを行います。
- ステークホルダーへのインタビューや調査を実施することでユーザー体験を評価し、摩擦点を特定します。
- 包括的なリスクおよびデジタルセキュリティ監査を実施します。
- 新しい環境のアジリティとスケーラビリティを評価し、計画された成長とイノベーションがサポートされていることを確認します。

第4章：その他の考慮事項

組織のクラウド導入のジャーニーが進み、最初の移行段階を完了した後にも、注意を払わなければならない重要な領域があります。このeBookの最終章では、クラウドへの投資の成功と長期的価値に大きく影響する重要な要因について説明します。これらの追加的な考慮事項に対処することで、組織は複雑な課題をより適切に管理し、クラウド戦略を完全に最適化できます。

まず、**合併、買収、分割(M&A)**の際には、クラウド環境に独特の複雑さが生じます。シームレスな統合、コスト管理、事業継続性の維持には、こうした移行期間におけるクラウドリソースの効果的な管理が不可欠です。テクノロジービジネスマネジメントにより、M&A活動におけるクラウドの意思決定に必要な財務の可視性とガバナンスが提供されます。

次に、**クラウドガバナンス**は、クラウドリソースが効率的かつ安全に使用されることを確実にするうえで重要な役割を果たします。強力なガバナンスのフレームワークにより、クラウドの利用、コンプライアンス、リスク管理に関する明確な方針が確立されます。TBMの実務を行うことで、組織はハイブリッドクラウド環境を通じてアジリティとコントロールを均衡させるガバナンス構造を構築できます。

最後に、**組織のクラウド価値の成熟度**は、TBMがFinOpsなどの他の財務管理実務にうまく統合されているか、またクラウドへの投資と並行してオンプレミスコストがどのように管理されているかによって決まります。クラウド戦略の進化に伴い、組織はTBMを活用することで、複雑なハイブリッドクラウド環境において情報に基づいた意思決定を可能にし、長期的な価値を確実に創造することができます。



合併、買収、分割

合併と買収(M&A)では、クラウドリソースのスケラビリティ、複雑性、コスト力学によりクラウドリソースを効果的に管理することが極めて重要です。TBMは、クラウドインフラの統合や分割に不可欠な可視性、財務管理、ガバナンスを提供することで、クラウドリソースに関わるM&A活動を強化します。ここでは、こうした特別な状況において、クラウド管理がTBMによってどのようにサポートされるかを説明します。

- 1. クラウドの稼働率とコストの可視化:** TBMにより、M&Aに関わる複数の事業部門や事業体にわたるクラウド支出やリソース稼働率が詳細に可視化されます。この可視化により、組織は冗長なまたは十分に利用されていないクラウドサービスを特定し、不必要なコストを削減することができます。また、クラウド運用の真のコストを明らかにし、クラウドリソースの統合、最適化、または処分を行うかどうかの意思決定をサポートします。
- 2. クラウド統合の最適化:** 合併や買収により2つの組織のクラウドインフラを統合する場合、TBMはクラウドサービス、アプリケーション、ワークロードの統合に関する意思決定を導くことができます。これには、両組織が使用しているクラウドサービス間の重複を特定し排除することで、インフラを合理化することが含まれます。
- 3. 分割におけるクラウドコストの最適化:** 通常、分割の場合、クラウドリソースを分け、再配分することで、別組織となった事業体が独立して運営できるようにします。TBMは、クラウドのコストとリソースを親会社と分割された事業体との間で配分するための体系的なアプローチを提供します。



- 4. ガバナンスとコンプライアンス:** M&A活動では、特に異なるプラットフォームや地域にまたがる機密データやクラウドリソースを扱う場合、強力なガバナンスが必要です。TBMにより、クラウドの支出と使用量に関する方針とアカウントビリティを整備することで、ガバナンスが強化されます。
- 5. より迅速なクラウド移行:** クラウド移行はM&Aにおいて、インフラを統合したり、資産を切り離したりする際に重要な側面となり得ます。TBMは、移行戦略の指針となる財務の洞察および運用の可視性を提供することでこれをサポートします。
- 6. M&A後のクラウドパフォーマンスの監視:** クラウド環境が統合または分割された後、TBMによりクラウドリソースのパフォーマンスを継続的に監視することが可能です。これにより、合併された事業体または分割された組織は、最適なクラウドパフォーマンスとコスト効率を維持できます。

M&A - デューデリジェンス

TBMでは、クラウド関連のコスト、リスク、パフォーマンスを評価し管理するための体系的なアプローチを提供します。これは特に、合併、買収、分割の際に重要で、デューデリジェンスによってクラウドリソースなどのテクノロジー資産が意思決定前に適切に評価されるようにします。TBMがクラウドデューデリジェンスをどのようにサポートするかについて、以下に記載します。

- クラウドコストの可視化:** TBMにより、デューデリジェンスの際にコスト構造を理解するために不可欠な、クラウド支出に関する詳細な洞察が提供されます。クラウド費用がサービス別、アプリケーション別、部門別に分類され、すべてのコストが可視化されます。TBMはまた、コストの傾向を分析し、トランザクション後の持続可能性と経費節減の可能性を評価するのに役立ちます。
- クラウド契約とベンダー管理:** デューデリジェンスには、クラウドサービス契約の精査も含まれます。TBMにより契約情報が一元化され、ベンダーの条件、リスク、再交渉の機会に関する洞察が提供されます。将来のコストに影響を与える可能性のある長期的な取り組みや割引などの詳細を確認できるようにします。
- クラウドリソースのインベントリと稼働率:** TBMによりクラウドリソースのインベントリが作成され、どのくらい効率的に使用されているかが示されます。使用されていないリソースや冗長なリソースが特定され、最適化の機会が提供されることで合併後のコストを削減できます。
- クラウドのリスク評価:** TBMは、対象のクラウドインフラにおけるリスクの評価に役立ちます。ビジネスプロセスをクラウドサービスにマッピングし、考えられる中断の影響を評価します。また、TBMにより、セキュリティと規制基準が確実に遵守され、リスクを軽減できます。
- クラウド投資の整合:** TBMは、クラウドへの投資がビジネス目標と整合しているかどうかを評価するのに役立ちます。クラウドの支出がどのように成果をもたらすかが示され、戦略的な整合性を確保できます。これは、対象のクラウド戦略が買収企業のビジョンに合致しているかどうか、あるいは再編が必要かどうかを判断するのに役立ちます。

TBMによりクラウド統合の障壁を解決

M&A&D活動におけるクラウド統合の障壁は通常、テクノロジー、財務、組織の複雑さに根ざしています。TBMは、クラウドリソースに関する財務の可視化、ガバナンス、戦略的整合性を提供することで、こうした障壁を軽減するのに役立ちます。ここでは、上位5つの障壁と、TBMがそれらにどのように対処するかを説明します。

- 互換性のないクラウドアーキテクチャー:** TBMにより、費用対効果分析とアーキテクチャーに関する意思決定が容易になります。
- データ移行の課題:** TBMにより移行コストが最適化され、データ転送中のコンプライアンスが確保されます。
- セキュリティとコンプライアンスに関するリスク:** TBMは一貫したセキュリティ方針をサポートし、必要なセキュリティツールへの支出を追跡します。
- コスト超過と非効率性:** TBMによりクラウドコストが可視化され、非効率性が特定され、予算超過が防止されます。
- 統一されたクラウドガバナンスの欠如:** TBMにより、組織全体で一貫したクラウド管理を行うための統一されたガバナンスフレームワークが整備されます。

クラウドの価値の成熟化

組織がクラウド戦略を進化させるにつれ、焦点は単にテクノロジーを導入することから、長期的な価値を最大化することへと移行しています。成熟したクラウド価値を実現するには、オンプレミス環境とクラウド環境をいずれも理解し、高度な財務管理を統合し、複雑なハイブリッドアーキテクチャーについて情報に基づいた意思決定を行うことが必要です。TBMは、こうしたレベルのクラウド価値実現を可能にするうえで重要な役割を果たします。

TBMを活用したオンプレミスコストのモデル化

オンプレミスコストを把握することは、クラウド戦略の重要な要素です。TBMはオンプレミスコストのモデル化のフレームワークを提供し、既存インフラのTCOの評価を可能にします。TBMでは、総勘定元帳のコストを関連するプールにマッピングし分類することで、オンプレミスシステムの運用による財務への影響について明確な洞察が得られます。その結果、ワークロードを移行するか、保持するか、リタイアさせるかについて、情報に基づいた意思決定ができるようになります。また、TBMにより運用経費と資本償却費が追跡され、ハイブリッド戦略においてすべてのオンプレミスコストが確実に考慮されます。

TBMとFinOpsの統合

クラウドの消費が拡大するにつれ、財務と運用のアカウンタビリティを整合させることが不可欠になっています。TBMとFinOpsの統合は、コストと使用量を最適化するうえで重要です。TBMはテクノロジーへの投資について長期的な戦略的視点を提供し、FinOpsはクラウドリソースのリアルタイム管理に焦点を当てます。これらを組み合わせることで、予算策定から日々の最適化まで、クラウドコスト管理に対するシームレスなアプローチが実現します。TBMはクラウド支出を可視化し、FinOpsは、チームがそのデータに基づいて行動し、コスト超過を防止できるようにします。この統合により、財務部門、IT部門、運用部門の間でコラボレーションが促進され、財務目標とテクノロジーのニーズが整合します。

ハイブリッドクラウドにおける意思決定支援のためのTBMの活用

ハイブリッドクラウド環境により、コスト、パフォーマンス、リスクの管理は一層複雑化しています。TBMは、さまざまなデプロイメントオプションにわたる異なる次元の価値を比較するフレームワークを提供することで、重要な意思決定をサポートします。組織はTBMを活用することで、さまざまな環境におけるワークロードのコストとメリットのモデル化、トレードオフの評価、ベンダーの固定やセキュリティに関する問題などのリスクの特定を行うことができます。TBMにより、ハイブリッドクラウドの意思決定を財務上および戦略上の目標に整合させることができ、組織は、クラウドのスケーラビリティとオンプレミスソリューションの管理のバランスを保つことができます。



結論: TBMを活用したクラウドの インテリジェントな導入

クラウドの導入により、大きな機会がもたらされるだけでなく、長期的な価値を阻む課題も生じます。戦略的かつ包括的なアプローチがなければ、移行は最適なソリューションにはならず、リソースを無駄にすることになりかねません。テクノロジービジネスマネジメントは、こうした課題に対処するためのフレームワークを提供し、移行のジャーニーを通じてデータ主導の意思決定を可能にします。

まず、初期評価を行い、ビジネスケースを作成します。TBMは、現在のパフォーマンスのベンチマークを行いながら、戦略的目標、アーキテクチャーの目標、およびユーザー目標を整合させるのに役立ちます。TBMの6つの次元の価値(コスト、パフォーマンス、リスク、体験、持続可能性、アジリティとイノベーション)を用いて包括的な価値計画を作成することで、バランスの取れた移行評価が可能になります。

適切な移行パスを選択することが重要です。クラウド移行の6つのR(リホスト、リプラットフォーム、リパーチェス、リファクタリング／リビルド、リタイア、リテイン)により、最適な戦略が提供されます。TBMは、TCOをモデル化し、その影響を明確にすることで、最適な戦略の提供をサポートします。

TBMは、シナリオプランニングを合理化することでトレードオフを理解し、戦略をビジネス価値に整合させるのに役立ちます。ソリューションのパイロットにより、本格的な移行の前にテストと調整が可能になります。TBMを活用してコストを追跡し、利益を確保することができます。

移行後、TBMは、メリットの実現を追跡し、結果を予測と比較して最適化の機会を評価するのに役立ちます。TBMを活用した継続的なモニタリングにより、長期にわたって価値が維持されます。

さらにTBMは、移行中の財務の可視性を提供することで、合併、買収、分割をサポートします。また、クラウドガバナンスを強化し、アジリティとコントロールのバランスを取り、コンプライアンスとセキュリティを確保するのに役立ちます。

つまり、TBMは、クラウドのインテリジェントな導入のための強固なフレームワークを提供します。戦略的計画策定、価値評価、移行パスの選択、メリットの追跡を統合することで、組織は、クラウドテクノロジーの可能性を最大限に引き出し、課題をイノベーション、効率性、成長の機会に変えることができます。

その他のリソース

TBM-Cloud Primer

「TBM-Cloud Primer」は、TBMの原則とツールをパブリッククラウドサービスに適用するための無料の入門コースです。このコースは、パブリッククラウドの導入が、デジタルアプリケーションを通じてビジネスパートナーまたは消費者にソリューションを提供するコストにどのような影響を与えるかを理解する必要がある、テクノロジー部門および財務部門の上級リーダー向けに設計されています。AIG、Liberty Mutual、HSBC、Goldman Sachsなど、大規模なワークロードをクラウドに移行した経験のある大手企業のベストプラクティスから学ぶことができます。TBMとFinOpsの実務が、単価の最適化、消費管理、TCO削減などの重要な成果においてどのように連携するかを確認できます。

TBMプログラムのリーダー、FinOpsの専門家、CIO、CFOは、パブリッククラウド環境やハイブリッド環境の双方で、ビジネスマネジメントの実務と規律を組織に導入するための包括的なアプローチの一環として、このコースを検討する必要があります。

「TBM-Cloud Primer」コースの詳細を確認し、申し込むには、[こちらのリンク](#)をクリックしてください。

TBM Executive Foundation Courseおよび認定資格

ビジネス志向の強い将来のテクノロジーリーダーを対象として特別に作られた初の教育プログラムを受講して、ビジネス感覚を磨きましょう。TBM Executive Foundation認定資格では、テクノロジービジネスマネジメントプログラムを成功させることにより、IT部門のビジネス変革を推進するうえで不可欠な知識を上級ITリーダーと財務マネージャーに提供します。コース受講後は、TBMカウンスルの認定資格が得られるため、ビジネス知識を証明することができます。

TBM Executive Foundation Courseは、TBMフレームワークの概要、および支出、リソース、投資から得られるビジネス価値と成果を高めるためにTBMをどのように活用するかについて基本的な理解が必要なIT部門と財務部門の上級リーダーを対象に設計されています。

間もなく公開されるTBM Executive Foundation Courseの詳細を確認し、申し込むには、[こちらのリンク](#)をクリックしてください。



TBMカOUNシルについて

TBMカOUNシルは2012年に設立された非営利事業団体で、TBMの規律に関する教育、各種基準、コラボレーションを通じてTBMの発展に取り組んでいます。地域だけでなくグローバルに活躍するビジネステクノロジーリーダーによって組織される独立ボードで、Mastercard、Wells Fargo、State Farm Insurance、Nike、Stanley Black & Decker、Equifax、ANZ Group、Commonwealth Bank of Australia、Adidas、Mercedes Benzなど、世界で最も革新的な企業によって構成される多様性に富んだグループです。TBMカOUNシルでは、リーダーが活用できるベストプラクティスを提供します。これにより、変化する市場力学に迅速に対応し、ビジネス目標を達成するためにクラウドとアジャイル戦略を最適化できます。

詳細を確認し、メンバーになるには、tbmcouncil.orgをご覧ください。

TBM Cloud Strategy Communityについて

TBM Cloud Strategy Communityは、組織が幅広いクラウド戦略、サービス、環境を活用して、テクノロジーへの投資と運用から得られる価値を高めるのをサポートします。このコミュニティは、TBMの各種基準や実務を活用してワークロードのインテリジェントな移行と導入を周知し、オンプレミスのコストをモデル化するほか、NISTやFinOpsなどの類似する基準と統合して、複雑なハイブリッドクラウド環境全体において日々意思決定をするうえで有効な情報を提供し、環境を最適化することで、持続可能性目標やAIによるイノベーションなどをサポートします。

メンバーとして参加することでエキサイティングな分野に共に貢献し、専門家とのつながりを広げ、TBMを活用してクラウドの成果を前進させるために重要な役割を果たしましょう。



TBM COUNCIL